

第11回作文コンクール

心のふれあい 大賞

主催 公益社団法人 福岡県医師会

共催 福岡県、福岡県教育委員会

後援 九州厚生局、福岡市、北九州市、久留米市、飯塚市、大牟田市、行橋市、福岡市教育委員会
北九州市教育委員会、読売新聞社、産経新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社、西日本新聞社(順不同)

目次

主催者あいさつ

表彰式の様子

入賞作品紹介

一般の部 最優秀賞

菊池 健 さん

4

一般の部 優秀賞

ペンネーム しののめ さん

6

一般の部 優秀賞

丸山 孝子 さん

8

中高生の部 最優秀賞

壇 京香 さん

10

中高生の部 優秀賞

宇都宮 優奈 さん

12

中高生の部 優秀賞

門倉 壮佑 さん

14

中高生の部 優秀賞

門田 知夏 さん

16

中高生の部 優秀賞

副島 晟人 さん

18

小学生の部 最優秀賞

石井 沙娃良 さん

20

小学生の部 優秀賞

立花 巧 さん

21

小学生の部 優秀賞

原住 幸蒔 さん

22

小学生の部 優秀賞

松本 大嗣 さん

23

選考委員

25

募集要項

26

主催者あいさつ



公益社団法人 福岡県医師会

会長 蓮澤 浩明

福岡県医師会作文コンクール「心のふれあい大賞——わたしのまわりの医療体験」は、医療従事者と患者さんや、ご家族との「信頼関係」という医療の原点にスポットを当て、その体験記を募集したもので、今回で十一回目を迎えました。

本年も、小学生から一般の方まで合計一九〇点ものご応募をいただき、一般の部・中高生の部・小学生の部から、それぞれ最優秀賞と優秀賞、合わせて十二名の方を表彰いたしました。

今回の応募作品は、その多くが医療を通じた出会いや医療従事者との信頼関係に基づくもので、人と人とが支え合うことの大切さや、言葉の持つ力を改めて感じさせられました。

私たち医療従事者は、必要な人が必要な時に、適切に医療を受けられるようにとの思いで日々医療と向き合っています。この度、皆様から頂きました実際の体験に基づく貴重な声をもとに、更により良い医療の実現に向けて取り組んでまいりたいと思います。

そして、この作品集が多くの方々の目に触れることで、医療への関心や、県民の皆様と医療従事者との絆がさらに深まっていくことを願っています。

今回受賞された皆様にご心よりお祝い申し上げますとともに、ご応募いただきました方々、またご支援を賜りました関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

表彰式の様子



(令和7年1月18日 (土) 福岡市・TKPエルガーラホール)

一列目

● 中高生の部 優秀賞

門倉 壮佑さん

● 中高生の部 優秀賞

副島 晟人さん

● 中高生の部 優秀賞

門田 知夏さん

● 中高生の部 最優秀賞

壇 京香さん

● 一般の部 最優秀賞

菊池 健さん

● 中高生の部 優秀賞

宇都宮優奈さん

● 一般の部 優秀賞

丸山 孝子さん

● 一般の部 優秀賞

ペンネーム
しののめさん

一列目

● 小学生の部 優秀賞

松本 大嗣さん

● 小学生の部 優秀賞

原住 幸蒔さん

● 福岡県医師会会長

蓮澤 浩明

● 小学生の部 最優秀賞

石井沙娃良さん

● 小学生の部 優秀賞

立花 巧遂さん



一般の部・最優秀賞
菊池 健さん



一般の部・優秀賞
しののめさん



一般の部・優秀賞
丸山 孝子さん



中高生の部・最優秀賞
壇 京香さん



中高生の部・優秀賞
宇都宮 優奈さん



中高生の部・優秀賞
門倉 壮佑さん



中高生の部・優秀賞
門田 知夏さん



中高生の部・最優秀賞
副島 晟人さん



小学生の部・最優秀賞
石井 沙娃良さん



小学生の部・優秀賞
立花 巧遂さん



小学生の部・優秀賞
原住 幸蒔さん



小学生の部・優秀賞
松本 大嗣さん



一般の部

最優秀賞

北九州市
菊池 健

「晴れ男」

梅雨明け間近の寝苦しいあの夜のこ
とを、私は決して忘れないだろう。今
は四十歳近くになった二人の子供が小
学六年生と四年生の時、妻はスキルス
がんとなり胃を全摘出した。手術は成
功して退院したものの、長い抗がん剤
治療が続くことになっていた。

子供が寝静まったのを確認して、妻
は布団の中の私に「ちょっといい」と
声をかけて来た。枕元の電気スタンド
の小さな電球が、瘦せた妻の横顔を照
らしていた。「私、がんでしょう？」が

んを告知してはいなかった。気が小さく、
心配性の妻には堪えられないと私は
思っていた。「腫瘍だ。それも切り取れ
るくらいの、悪性ではない類の」と私
は言い張ったが、妻は引き下がらない。

退院後、治療で通う診療科に集まる
患者は全員胃がんであること、「使っ
ている薬も私と同じ。腫瘍であるはず
がない」。逃げ道を塞ぐように攻め立
てて来る。結婚して十三年、彼女にこ

んな強さがあるとは思いもしなかった。
追い詰められた私はがんであることを
告げざるを得なかった。領いた妻は、

抗がん剤治療を止めたいと言い出した。
「体がきつくて動けなくなる。味覚障
害が始めていて、料理の味が分から

なくなってしまう」と。いつまで生き
ていられるか分からない。だったら、
母親の味を二人の子供に覚えていても
らいたい、そう言うのだった。

妻の手術の執刀医、I先生は、その
総合病院でも指折りの外科医だった。手
術前、病状と手術の大まかな手順を私一
人で先生から聞いた。妻のスキルス胃が
んは、初期とは言えない、かなりステー
ジの進んだものであること。手術が成功
しても、五年後の生存率は五〇%を切る。
しかも生きている人の中には転移、再発
している者も含まれての数字であること
など、厳しい現実を突きつけられた。

「開腹して胃の外側のがんが出てい
て、芥子粒のようなものが見えたら、
転移している可能性があるのです、直ぐ
に手術を終えてお腹を塞ぐ。だから、
一時間もかからない。手術が二時間、
三時間になるよう祈っていて下さい」
とI先生は言ったのだった。

私の人生であれほど長い一時間はなかった。祈りは通じ、手術は三時間余に及んだ。スキルスに冒された胃は取り除き、食道に小腸をつなげることが出来た。しかし、食道のぎりぎりまでスキルスが近付いており、小腸とつなぐ糊代とも言うべき部分は、本当にわずかしかなかったと、後日、聞かされた。

妻にがんを告知しないと決意したのは、I先生と相談した上のことだった。妻の性格について説明し、子供たちもまだ幼いことも考えて、「腫瘍と言います」と先生に告げたのだった。「分かりました。では自分もそのように言います」とのことだった。それが、妻に見破られた上に、抗がん剤治療も止めたいと言いつ出したのだから、実際のところ私は頭を抱えた。

I先生に有難に妻の言葉を伝えた。自分の命と引き換えにしてもいいから、出来るだけ子供たちの世話をして、思

い出を作ってやりたいとの言葉もそのままの言い方で。抗がん剤が妻の体力を奪っていることを先生も見て取っていた。味覚障害が出始めていることも承知であった。その上で、こう話してくれたのだった。

「はつきり言って、抗がん剤がその患者にどれだけ効果があるかは分からないところがあるのは事実。別の人に効いてもその人に効くとは限らない。最新の薬であっても事情は同じで、一歩一歩効果を実際に確認して進んで行くものだ。奥さんの人生は奥さんの人生。夫婦で決めたことであれば私も尊重しましょう。しかし、がんマーカーの数値は継続して見て行きます。要注意になったら抗がん剤治療を再開することは約束して下さい」

五年後の生存率が五〇%を切っていたはずの妻は、来年、手術から三〇年を迎える。抗がん剤治療を止めてからは体

調も良く、苦手だった料理に力を注ぎ、子供たちの学校行事には必ず手作り弁当を持たせた。味覚障害も最小限度に留まったようだった。引つ込み思案の性格まで変わり、水彩画、書道、ジム通いと別人のように人生を楽しみ始めた。

総合病院勤務を終えて開業されたI先生は我が家の家庭医となつて頂き、妻の術後の経過も見て頂いている。妻の変貌ぶりを聞いたI先生の奥様が「会って話してみたい」と言い出し、今では家族ぐるみのお付き合いになっている。私とI先生はゴルフ仲間となり、月一回、プレーを楽しんでいる。週間天気予報で大雨であっても、ゴルフの日になると、悪くても曇り空、良ければ青空が広がる。I先生の執刀で救われた患者さんたちの命が、強烈な「晴れ男」の資格を与え、天を動かしているのではないか。その大勢の中の一人である

妻の解説に、私もただただ頷くのである。



入賞作品

一般の部

優秀賞



北九州市

ペンネーム しののめ

「春から夏へ ——精神科病棟と わたしの青年時代」

さくらの季節である。

病院脇のさくらもいよいよ満開で、何人もの人が立ち止まってカメラを向けているのを冷ややかに見ていた。「美しいさくらを見ながら死ねば美しくて

幸せな気持ちのまま死ぬる」と思いつつ、わたしにはもうさくらを美しいと感じる心は残っていないかった。もはやさくらはただの「白い木」でしかなかった。結局今年もわたしはさくらを鑑賞しないままさくらの季節は終わるのだろうか。

さくらの季節の終わりに、わたしの命も終わるはずだったのに、まわりの人たちが病院に行つてほしがるので病院に行つたら帰れなくなつてしまった。夢と現実の境界なんて分からなくて、生きている実感もなくて、毎日死にたい気持ちでいっぱい、ふとした瞬間に列車に飛び込みたい欲がブンブンしているような日々なんて、病院ではなく自分の手ではやく終わらせて解決するべきだったのに。生きているはずではなかったこれらの日々をわたしはどうやって生きればいいのか。

入院してから病棟で、わたしは拒食・拒薬を続けた。病院で無理やり生かされていくだけであつて、わたしはもう生きていくはずではないから、食事も

薬もいらなかった。そんなわたしを医師も看護師も熱心に生かそうとした。「良くなると思つてるんですよ！」病室に代わる代わる来て、毎日何時間も説得された。まるで「話せばわかる」というように……。生きたい人を生かせばいいのに、どうして治療する気のないわたしを生かしているのか、わたしには分からなかった。

結局、わたしは連日の説得に負け、食事摂取・服薬をはじめた。もしかしたら、負けたのではなく、また明日話そうと言つたら絶対次の日に話に来てくれるとか、そういった小さいところから少しずつ信頼感が生まれてきたのかも知れない。

それでも治療はいつもうまくいったわけではなかった。でも、薬を拒否をした日も、「いまの気分では飲めなかつたんだから自分を責める必要はないよ、もし飲みたくなつたらいつでも言つて」と声をかけてくれた。わたしが薬を飲むようによく気にかけてくれて、薬が効かないと訴えて変えてもらえた

時には「お薬、変えてもらえたって！飲んでみてよ、明日夜勤で来るからその時に感想教えて」とわざわざ報告してくれた。暴れて注射になってしまった時も、注射後に見捨てずに寄り添ってくれた看護師がいた。

朝夕の回診をはじめとして、入院中は医師と話す機会が多かった。わたしは言う「しののめはだめな子だから」に対して、医師は「まわりの子見てだめな子だと思う？」「ううん」「じゃあなんでしののめだけだめな子なの？」しののめだけ特別？」と問いを投げかけてくれた。病気でできなくても、「時間かかるけど今から学んで行こう？」と病気があっても成長できることを教えてくれた。病気というとなんとなく教育より支援が先に浮かんでしまうけれど、病気があっても教育ができること、そして教育的なやりとりの中である程度病気への対処ができることを学んだ気がする。

病棟から見えるさくらの木の緑が日に日に鮮やかになってゆく。病棟に來

たばかりのころは「死にたい、死にたいよう」とどこでも泣きじゃくっていたわたしが、「死にたくありません」と看護師を呼んでいるのを見た周りの子が、前より良くなったねと言った。入院してから、生きた心地のしなかった入院前よりもいくらか気持ち落ち着いてきて、わたしはやっぱ病気なのかあとと思った。

「今日は外は20度超えるんだって」と看護師が言う。外の土埃が、初夏の風が恋しくなってきたころ、退院日が決まった。入院してからはじめてテレビの天気予報を見た。いよいよ退院するんだなという実感。

退院した日は、地面に立ってみたら病棟から見えていたよりも緑がずっと濃くて、歩いて少し暑くて汗をかいたことが夏らしく嬉しかった。

入院は一度では済まなかった。希死念慮は何度も悪化して、入退院を繰り返した。だけど、そのたびに、医師や看護師が死にたいと言う患者を生かそうとするのは、職業倫理だからという

消極的な理由だけではなくて、希死念慮は治療できるから、だと気づいた。ほんとうは、精神疾患なんて抱えたくなかった。「元気なしのめちゃん」からはほど遠いのに、「元気です」なんてウソついて元気なフリをして生きているのはつらかった。

病気になろうと思ってなかったわけでもないのに、病気で差別されることも何度もあった。一方で、病気になって世界が広がったのも確か。当事者になったから（医学部ではないけれど）精神医学の授業を取り、精神科病院実習にも参加させてもらった。そして、精神疾患がありながらも医師になった先生にも出会い、わたしがこれから先どこまで良くなるのかは分からないけれど、いつかこんなふうに元気に働ける未来もあるのかもしれないと思っただ。

「いつか」はまだ見えないけれど、わたし、いつかきつと元気になりますよ！



入賞作品

一般の部

優秀賞



福岡市
丸山 孝子

「感動しました」

五十代の初め、病を得て2つの病院をかけた。もちした。

転院するその日、エレベーターの前迄見送ってくれた担当医師。『よかつたら病状を知らせて』との言葉に『もちろん』と返し、私は次の病院で手術をうけた。

少しおちついてから病室で先生にペンをとった。

転院してからのことや、私の死生感もつづつた。その後、病室に電話があり、久しぶりの先生の声にうれしくなった。その上、私の手紙をよんで、『感動しました』といわれ驚いた。

人に手紙をだして、そんな言葉をもたらしたのは、うまれて初めてだった。それから私は先生にペンをとつて

いた。

多忙な先生も、その忙しさをハガキににじませながら、回復した私の体に安堵され『元気になった姿を一度みせて下さい』とあり、すぐにでもと思っていた。

しかし、近場の病院でもあり、いつでも行けるとの安易な気持ちで雑事に追われ、時がすぎた。

その内、先生からの音信がとだえ、不安と心配で、しかし、やっと事情を

知ることができたときは、先生はずでにこの世の人ではなかった。

『まさか』との思いと、何故、早く会いに行かなかつたのかと自分を責めた。同じ医師である息子さんに、くわしいことをきけたのは先生が亡くなられて、ずい分たつてからだった。

医師としての仕事以外に、事務処理の機械化などで心身をすりへらしていたという。

病院には、自らの体調のことなどふせて退職したという。

私が体調をくずし、あわてて病院にかけこんだときの主治医が先生だった。互いに歯に衣着せぬ物言いで、決して初対面の印象はいい方ではなかった。

その後、入院して、血液検査の結果、貧血以外どこも悪くないが、いつ倒れてもおかしくないほど体の中の血液が足りない先生をあわてさせた。

そして、夜を通して輸血が施された。

その後、〝やっと人間らしい顔色になったね〞と私の様子をみにこられたときそう言われた。

〝なおりますか？〞の私の言葉に、〝なおしましょう〞と明確にこたえてくれた。これ迄、父母の病に長くつきそってきしたが、これほど、心強い安心感を与えてくれる医師の言葉に出会ったことがなかった。

私は、〝信頼のおける先生だ〞と確信した。

家族が私のためにもってきた〝梅干し〞を、〝先生もどうぞ〞とすすめると、ためらいもなくつまんで口にいれる、そんなきさくな先生だった。

結局、私の病が〝子宮筋シユ〞が大きくなって体に負担をかけていることがわかり転院して手術をうけることになったのだ。病院の手配も先生がテキパキとしてくれた。しかしそのとき、笑顔で見送ってくれた姿が先生をみた

最後となった。

何故、早く会いに行かなかったのか、今も悔いが残る。

〝思いつたが吉日〞という言葉がある。何ごとも後まわしにせず、心が自分によびかけていると感じたら、今ではすぐに行動するようにしている。

父母の長い闘病で、多くの医師をみてきたが、これほど親しみを感じ、患者を思ってくれた医師は思いあたらな

い。

私の手紙をよんで、〝感動しました〞という言葉がくれた、その心意を知ることもなく、大切な方を失ってしまった。

後悔ばかりが心をよぎるが、只々、病をきっかけに先生と出会えたことを感謝している。

先生が手紙をかくときに使ったもの、私に愛用していた万年筆のような、水性ボールペンを贈ったこ

とがある。

頂いた返事には、〝こんなすぐれものがあるとは知りませんでした。これからはこれを使います〞と贈ったものがうれしくなる言葉をくれた。

重ね重ね、どんなことにも感動される先生だったなとふり返りつつ、再会できなかったことだけが、唯一の心のこりとなった。



中高生の部

最優秀賞



福岡市・高校2年
壇 京香

「大丈夫」の心強さ

「目がさめましたね。よく頑張りました。まだ痛みは出ていないですか。」深い眠りから目がさめて、この言葉をいつも診てくださっている先生からかけられる。この言葉は不思議だ。まだ生きていく喜びともしっかり生きていくのであろう未来を私に与えてくれるから。

医療の原点。医療従事者と患者、その家族の間の信頼関係。医療というのは人の体も心もケアすること。私の家族はそんな医療にずっと支えられてきた。きっと、これからも。だから、そんな私の家族を例に医療の原点を探してみようと思う。

私は生まれながらの病氣、つまり先天性の病氣を持って生まれてきた。今まで手術を繰り返して来た。手術は慣れることはなく、毎日が恐怖。でも、初めに話した言葉を聞くと安心する。

ああ、私まだ生きたい。生きたい。と思う。でも、心の中では先生が私を死なせる事はないと思っている。それくらい力があるのは先生の「大丈夫。」という言葉。もしかすると、大丈夫じゃないかもしれないし、先生としてはあまり良くない言動なのかもしれない。それでも、物心ついてから初めての手術の時、私は心が救われた。学校に行

き始めるとみんなとは違う見た目と見慣れない物を身体に付けていたから笑われたり、隠されたり、辛いこともあった。でも、先生に話すと、私の頑張りの証だから恥ずかしく思う必要はないし、必要な物だから触らないでと伝えていいと毎回決まってアドバイスをくれた。今はみんなと変わらない見目になって、身体にも何も付けていないから何も言われなくなった。私にとって先生はいつも応援してくれて勇気を与える大好きな存在だ。これは私の両親、弟も同じだろう。初めての子どもが病氣で生まれてきて、悩んだだろうし、迷ったと思う。弟も同じ病氣を持って生まれてきた。兄弟どちらもこの病氣を持って生まれる確率は十分の一だと聞いたことがある。悩んだり、迷ったりしたとき、選択肢を説明して話し合う時間を取って、家族の次に私たちの成長を長く見守ってくれた

先生。医療と私たちをつなぐ信頼関係は医療だけにある物ではなく、世界中につながっていると思う。

私には弟がいると話したが、私と弟の間には妹がいる。妹は染色体異常で生まれてきた。私たちの家に帰ってこられたのはわずか一回。ずっと病院で暮らしている妹が必要としている物。人工呼吸器。これがなければ妹はこまで生きることがなかっただろう。命をつなぐために必須。でもこれを取りつけるためにはのどに穴を開けるという処置が必要だった。この処置を受けるかどうか悩んだとき、両親に親身に相談を聞いてくださった妹の主治医の先生。妹の病気は一歳の誕生日を迎えられる子は約十パーセント。処置をしても一歳になれないかもしれない。それでも先生はたくさんの可能性を説明してくれたと聞いた。妹は処置を受けて一歳になった。私が十二歳になって

一カ月。九歳で星になった妹は私たち家族にたくさんのお宝をくれた。妹の主治医の先生も看護師のみなさんもずっと家族に寄り添ってくれて感謝でいっぱいだと母から聞いた。先日、妹を五年間お世話してくださっていた看護師さんからすてきな絵本とお手紙が届いた。私はずっと忘れないと思う。妹を大切に思ってくれている人は家族だけではないということ。

医療の原点。医療従事者と患者、その家族との信頼関係。私の家族は医療に支えられて生活している。でも、医療とは何かと言われるとその姿は病院だけにあるものではないと思う。生と死が交錯する世界で医療とは人々の心をも救う存在だ。生きられないと思う人が一人でも少なくなるように。戦争がゼロにならないこの世界で患者さんの体も心も笑顔にしようと毎日頑張ってくださいている方々へ。医療の一部

しか体験したことのない私ですが、今笑顔で高校に通うことができ、友達と笑いながら毎日を過ごせているのは、あの時笑顔で私に話しかけてくれた名前を覚えてもらえなかった看護師の方のおかげです。毎日たくさんのお患者さんに勇気を与えてくれてありがとうございます。ございます。これからたくさんの方が笑顔で明日を迎えられますように。青空から妹が私たちの頑張りを見てくれていると信じて私は自分の夢を追い続けるつもりだ。私の手術の時、私の勇気を引っ張り出してくれたあの先生のようにたくさんの方々の笑顔を守る大人になれるように。



中高生の部

優秀賞



福岡市・高校2年
宇都宮 優奈

「人として 大切なものとは」

私の七歳の七五三祝い。場所は病院の中だった。母が癌で入院していたのだ。私がどうしても七五三をしたいと、父に何度も何日もお願いをした結果である。わがままを言うのは良くないと分かっていたものの、その願いを諦め

ることができなかった。しかし、今振り返ると、あのときのわがままは良かったのかもしれない。なぜなら、そこでの写真は母との最後の写真になったからだ。母と手を握り合い撮った家族写真のことは鮮明に覚えている。母は撮影が終わっても、私の手をいつまでも握って離さなかった。母の入院中、いい子でいるよう努めた私がこの時ばかりは粘ったのは、何かを感じ取ったからだろうか。その約二週間後、母は癌のため息を引き取った。

母の闘病の日々を振り返り確信したことがある。それは医師や看護師は技量も大切ではあるがそれに引けを取らないほど、患者と信頼し合う関係にあるかが大事ということだ。高い技量があつてこそ信頼関係が構築されるのかもしれない。しかし、少なくとも私の母は医師や看護師たちの腕に執着していたとは言えない。

先ほどの大規模の病院に入院する前だが、最初に癌と分かった時、母は自宅近くの病院で癌の摘出手術をするこトになった。そこで手術したのはいいものの母の顔色は悪く私たち家族は心配した。医師の方に相談すると腫瘍自体は摘出できたが、血管に傷がついてしまっていたようだ。これを聞き、父は心にかんりのダメージを負ったそうだが、当の本人である母はそうではなかった。再手術になっても嫌と思わずに受けた。なぜなら母はその医師のことを信頼していたからだ。手術の結果は成功ではなくても、切れることのない絆があつたのだ。母に信頼し続けた理由を直接尋ねることはもうできないが、父にこの時の話を聞くと「何故かよく分からないけど、先生からいい運を感じたらしいよ。だからお母さんは先生を信頼しきっていったんだ。」と不思議な答えを返された。その病院でお

世話になった先生は母の言う通り幸運の持ち主だった方のようで、再手術後は母の容態は回復、癌の再発もしばらく起こらなかつたらしい。いい運があるから信頼するという驚きの考え方が、優れた技量のありなしに関わらず信頼関係は生まれていることは確かだ。

しかし、癌は母を再度襲った。残念なこと、幸運の先生は別の病院へ移動なさっていた。そのため新たな先生に診ていただくことになったのだが母の調子はあまり良くなかった。そのまま急激に癌は進行したため、先ほどの最期を過ぎた大規模の病院へ移り入院することとなった。ここでは女性の医師にお世話になった。先生は笑顔がまぶしい方で、母は先生との会話を楽しんだ。周りでサポートして下さる看護師の皆さんも優しさで溢れていた。幼い頃の出来事で記憶が曖昧な私であつても、看護師さんがにこやかに話

しかけてくださったことははつきりと思ひ出せる。人見知りで家族以外には首を縦か横に振る程度の返事ばかりしていた私であつてもたくさん話しかけてくださった。

これらの皆さんのおかげで、母が笑う姿をよく見るようになった。相手に自分のことを預けてもよいという気持ち一つでここまで変わるのかと今では感じる。また、この頃の幼い私は母があとわずかで亡くなるということにほとんど気付かず、不安や恐怖もあまり感じることはなかった。これは、両親と主に看護師の方々がそうなるよう動いてくださったからだ。そして、医師の方も母に抗がん剤治療をするか否かをまるで家族の一員であるかのように真剣に考えてくださった。周りの事をよく分かっていた私にもそのことが伝わってきた。このように母のみならず家族一人一人を医療現場の人た

ちは自然と支えているのだ。これは信頼関係の構築に大きな影響を持っている。ここまで手厚いことを自然にできるといふ点は私たちも見習うべきだ。人は能力よりもむしろ自然な気遣いができるかが大切なのだ。また、そこから生まれる信頼関係は強力なものとなる。医療従事者のみならず全ての人に共通して言えるはずだ。



中高生の部

優秀賞



福岡市・中学3年
門倉 壮佑

「初めての『大事』」

あの時、私は人生で初めての骨折をした。初めて大きな怪我を負い、初めて長期にわたる治療に努めた。この体験記は、あの時自分が体験したこと、また、そこから感じられたことを書き著したものである。

遡ること二年前、私はゴルフの習い

事が終わり、自転車に乗って帰宅して

いた。その日の練習では偶然最大飛距

離を更新することができ、いつもより

高めのテンションが心の中を駆け回っ

ていたのだ。嬉しいことがあるとすぐ

調子に乗ってしまう私は、自転車を爆

走させ、猛スピードで坂道を下ってい

た。しかし、もうすぐ坂道を下り終え

ようとしたところで……私は近くに

あった小さな段差に気づかず、タイヤ

が勢いよくぶつかり、歩道側へ自転車

ごと転倒してしまったのである。次の

瞬間、過去に味わったことのない猛烈

な痛みが私の右腕の中を走ったのであ

る。私は、まさかと思って痛みのある

場所に目をやった。するとどうだろう。

擦り傷があるだけではなく、赤く腫れ

ているではないか。慌てた気持ちも

あったか、思うように体が動けない。

もう片方の手でゆっくり自転車を押し

て、どうにか心を落ちつけながら帰宅

した。

次の日の朝、私は家の近くにある整

形外科へ向かった。整形外科の通院が

はじめてであったこともあり、また病

院に行くのも久々だったため、その時

の私は少し緊張していた。受付を済ま

せ、自分の順番が来るまで待っていた。

そしていよいよ診察だ。診察室に入り

挨拶をする。すると、医師からはじめ

にある言葉が出てきた。その言葉は、

「やあ、どうしたと？」であった。実は、

私はその言葉を聞いて、少し驚いたの

である。一見日常的に聞く言葉ではあ

るが、内容はもちろんのこと、やわら

かい口調からも、医師の優しさや人柄

が表れたような気がしたのだ。私は正

直、ここまで優しさを感じた医師に出

会ったことはなかった。しかし、この

事態を受けて、私は感動したのである。

診察が始まった。私は怪我した箇所

に触れられることが苦手であり、不安

な気持ち少し入り混じっていた。それでも、先生は、「あー、これは大事（おごと。博多の方言として、『大きな問題』という意味で使用されるようだ。）やねー」と言い、骨折箇所をしばらく眺めた。しばらくしてレントゲン検査を受け、検査結果がコンピューターに表示される。するとどうだろう。骨の折れた箇所が離れており、一部の方向が曲がっているではないか。それでも先生は、「これは痛かったやろうに。先生もな、あんたと同じ中学生だった頃に、同じように骨折したことがあったとよ。」そう言っつて私の腕に包帯を巻いてくれたのだった。私は三日後に期末検査を控えており、利き手を骨折してしまつては、上手に文字を書くことができず、良い成績も取れないだろうと不安になっていた。しかし、先生はそのことについての対処法も教えていただき、痛み止めも渡してくださいさつ

た。この対処をしていただいたことで私の不安は和らぎ、前向きな気持ちで試験に向かおうと決意することができた。診察室を出るときも、「よし、もうこれでよかつ、自分の体は大事にする」と笑顔で送り出してくれた。私はその時、久しぶりに心の芯から温まる感情に包まれた。同時に、自分が骨折した時の不安や悩みまでもが、一気に解消された気がした。

私はこれまで、医療に携る人は皆、完璧な知識と手術や治療の技術が必要とするものだと思っていた。しかし、今回の骨折を通して、医師というものは患者をはじめとしてたくさんの人と向き合う心、周囲の人々を大切にしたいが医者という職業に最も大切ではないかと思つたのだ。医者として、そして人間として最も「大事」なことは何か。今回の経験を通して、初めてそれを学んだ気がする。

月日は風のように流れ、三、四ヶ月ほど経過し、骨折も完治させることができた。今は自分の体を大切に、そして周囲の人々との向き合い方も忘れずに過ごせている。

最後に、自分の骨折と真剣に向き合い、治して下さった整形外科病院の院長先生、ありがとうございます！



中高生の部

優秀賞



北九州市・中学1年
門田 知夏

「ありがとうの バトン」

私は、生まれた時から心臓に穴が空いていたそうです。

「心房中隔欠損症」と言って、百人に一人の割合で起こると言われています。その影響なのか分かりませんが、風邪をよく引き、またこじらせて肺炎

となり、入院することもありました。

私が「心房中隔欠損症」だと判明したのは保育所の年中さんの頃でした。

保育所で定期的に実施される健康診断で来てくださったっていた嘱託医の先生が見つけてくださいました。手術後も保育所でお会いしたと思うのですが小さかった私が、先生にお礼を言えるはずありません。

私の「心房中隔欠損症」に関わってくださり、ありがとうを伝えたい人がまだいます。手術を受けた総合病院の先生方です。知らない場所・人、長い待ち時間、そして今後の手術のこと……。不安やモヤモヤでたまらなくなつた状態で最初にあつたのが、循環器小児科の先生でした。

名前を呼ばれて、診察室に入ると明るく笑顔でいてくださって、私も母もホッとしたのを覚えています。直接手術には関わってはいないけれど、そ

の前の検診で対応してください、心構えやアドバイスの他、たわいのない会話をしたりして、私たち家族を安心させるような声かけをしてくださいました。

私の場合、穴を閉じる手術の前に、カテーテル検査で数日入院をしました。カテーテル手術が出来るかどうかを知るためのものでした。結果は、それは出来ず、正中切開法という胸の真ん中を切開する方法で手術することに決まり、検査から五ヶ月後、いよいよ手術となりました。

検査入院の時も、手術の時も、その小児科の先生は、時間を見ては病室に会いに来てくださいました。「ごはんはおいしいですか?」、「何をしているの?」と、ちよつとした会話なのですが、それがとても大事なことだったと、今は十分理解できます。そんなこともお医者さんの仕事だと割り切つて言え

ばそうなのですが、でも患者の方からすれば、そうして寄り添ってもらうことで心穏やかになれるのです。

手術は、予定の時間より長くなったらしく、父母は心配したと今も度々聞かされますが、無事に終わりました。

小児科の先生以外にも看護師さんはもちろん、執刀してくださった外科の先生方が病室に来てくださり、「よくがんばったね」、「退院までもう少しだよ」と声をかけてくださいました。少し経つと、今度はリハビリの先生にもお世話になり、訓練の一つとしてシャボン玉をしたことは楽しい思い出になっています。

私の「心房中隔欠損症」に対して、多くの医療関係者の方々が関わってくださいました。私の心臓の異常を見つけてくださった保育所の嘱託医の先生、安心をくださった循環器小児科の先生、病室でお世話になった病棟内の看護師

さん、直接会うことはなかった手術室の麻酔の先生や看護師さん、入院中の食事に関わってくくださった栄養士さん・調理師さんそれから薬剤師さん、病室の清掃員さんにも感謝の気持ちでいっぱいです。この想いは、直接もう届けることはできないけれど、今度は私が恩返ししていこうと思っています。

私の将来の夢は、薬剤師もしくは監察医になることです。私がいただいた「ありがとう」のバトンを患者さんたちに渡すことです。それなのに今の私は、数学や理科に苦手意識を持っています。だけど、これからたくさん勉強や部活動に打ち込んで自分にしっかりと自信をつけ、苦手意識を克服し、夢を夢のままに終わらせたりしません。夢を必ず実現できるように頑張ります。私が先生方からいただいた「ありがとう」の気持ちを忘れずに。



中高生の部

優秀賞



福岡市・中学2年
副島 晟人

「守られている命」

「あきとくん、調子はどう？」

この会話からいつも僕の診察は始まる。

生まれてから十四年病院に通っているが、未だに採血と診察前は緊張する。

それを知っているのか知らないのかは分からないが、採血の看護師さんも

担当の先生も僕に優しく話しかけてくれる。

「大きくなったねー。」こう言われるとちよつとうれしくなるし、

「小さいときは泣きよったもんねー。」

と言われるとちよつと照れくさい。

最近、診察中にうれしいことがあった。

先生が僕に病気のことや薬のことを説明してくれたことだ。まだ完全に理解はできてはいないが、僕を一人の「患者」として扱ってもらえた気がしてとてもうれしかった。

それと同時に先生が、母が僕が生まれてからずっと不安をかかえながら大事に育ててくれていることも教えてくれた。先生の診察をうけて、これからはもつと自分で体調管理をこころがけようと思った。

僕は、胆管炎を起こして急に体調が悪くなる時がある。昨日までは平気

だったのに、急にだ。お腹が猛烈に痛くなって、体がきつくて高熱が出てしまう。そうなってしまった時は、救急で病院を受診しなければならぬ。

「お腹触るね。どこが痛い？ ちよつと痛いけど点滴刺すね」初めて見る先生の場合が多いが、きちんと対処して、担当の先生に引き継いでくれるので、僕は信頼している。そして、忙しくても診察と処置をしてもらえる環境に感謝している。

僕は、ずっと薬を服用している。正直、何も考えずに処方された薬を当たり前のように飲んでる。先生に「採血結果と体調を見て減らせるお薬は減らそうね。」そう言われたとき、ハツとした。もちろん、ずっと飲まないといけない薬もあるが、薬は少ないほうがいいに決まっている。毎日同じ内容や流れ作業的ではなく、しっかり僕のことを考えて診察してくれている気が

している気がしてうれしかった。僕は生後二ヶ月で手術を受けたので、その頃の記憶はないが、母から手術後の説明を聞く時に、先生が一気におじいちゃんになっていたと聞かされた。表現方法が正しいのか分からないが、それぐらい長時間で難しい手術だったのだろう。その後も採血を嫌がったり、入院で絶食だったり、僕の中ではうっすらとした記憶しかないが、母は大変だったようだ。でも、看護師や先生たちに励まされて乗り切れたと言っている。

僕は制限があったり我慢しないといけないこともあるけれど、先生、看護師さん、家族、支えてくれるまわりの人に救ってもらって育ててもらったこの体を相棒に上手く付き合いなから、ずっと大切に生きていこうと思っっている。「あきとくん、何か聞きたいことはない？」診察の時、いつも先生から

聞かれるのだが、次回からは積極的に質問してみようと思う。





入賞作品

●小学生の部 最優秀賞 — 「献血フラワー」

小学生の部

最優秀賞



八女市・小学3年
石井 沙娃良

「献血フラワー」

私には親戚のお兄さんがいて、血液の病気で一週間に一回の輸血を受けていました。お兄さんが元気になるために受けていた輸血のことをくわしく知りたいと思います、私は日本赤十字社血液センターの見学に行きました。そこで、広報の担当の方から丁寧に献血の役わ

りや血液センターの仕事を説明してもらいました。

私たちの国では、病気の治療や手術のために、輸血や血液から作られる薬を必要な患者さんが多くいます。血液センターでは、健康な人から献血してもらった血液を成分ごとに分けたり、色々な検査をしたり、安全に輸血や病気の治療ができるようにきびしい管理をしてありました。

そこで出来たての輸血パックを触らせてもらいました。私はその時に「あたたかい命のぬくもり」を感じました。誰かが誰かの命を救うためにバトンタッチした大切な血液だからです。

しかし、献血は難しい課題があります。血液は長く保存ができないことで、たくさん献血がいつも必要なのに、若い年齢の人たちの献血が少なくなってきたりからです。このままでは将来、血液が足りなくて病気の治療や手

術ができなくなるかもしれません。

「小、中学生の人たちも献血の大切さを知ってほしいです。そして、献血ができる年齢になったら献血をしてもらいたいです。」

広報担当の方は心を込めて言われました。私は、その言葉がとても心に残っています。

私が献血できるまであと二五三八日。私は自主学習をして学校で献血の大切さを伝えていきます。親戚のお兄さんのように血液が必要な人やいつか必要になるかもしれない自分や家族のために「献血の花」をたくさん咲かせていきたいです。



入賞作品

●小学生の部 優秀賞 — 「私の医療体験」

小学生の部

優秀賞



北九州市・小学6年
原住 幸蒔

「私の医療体験」

私は三年生の時、登校中に大きなけがをして救急車で運ばれたことがあります。ほったたをすり、おでこを切りました。その時私はとても怖かったけど、救急隊員の皆さんがいろいろな話をしてくれたので元気が出てきました。病院につくと三人の先生が一生懸命手

当てをしてくれました。一人の先生が面白い事を言って気を紛らわせてくれました。一つ一つ治療をするときに毎回優しく声をかけてくれたので私は安心して治療を受けることができました。そして傷の汚れを取るため歯ブラシで磨いてくれました。おでこは切れていたので、麻酔をして、九つ十針ぬいました。私はぬうのが初めてだったからドキドキしたけど、先生が優しくしてくれましたので全然痛くありませんでした。ぬった日の二週間後ぐらいに抜糸をしました。また病院に行きました。自分の番が来るまではドキドキしていたけど、抜糸をしてくれた先生もとてもやさしかったのでよかったです。

そして患者さんの様子を見て気持ち落ち着かせたり、精神的なケアをしたりする姿を見て、お医者さんはケガなどを治すだけが仕事じゃないと感じました。

救急隊の皆さんも、お医者さんと同じようにケガをしたり、体調が悪くなったりした人を助けるだけが仕事じゃないということが感じられました。病院の先生がすぐに手当てをしてくれたので今は、一つも傷あとがなく、元通りきれいな顔に戻れました。その時助けてくれた救急隊員の皆さん、病院の先生方にとっても感謝しています。

小学生の部

優秀賞



福岡市・小学5年
松本 大嗣

「初めての手術」

夏休みにN病院で虫垂炎の手術を受けました。ぼくにとつては、初めての手術だったので、不安でとてもこわかったです。

七月二十三日の夜おなかに異変を感じました。その時は、おなかをこわしたと思いましたが、次の日の朝か

らおなかがとてもいたくなりました。実は、四年生の時に一度、同じような症状がでたのです。そして、あの時のいたみと似ていたので、すぐに虫垂炎だと思いました。それから、おばあちゃんに仕事をしているお母さんへ電話をしてもらって、お母さんといっしょに車でN病院へと向かいました。その後、たくさんの検査を終え、手術をすることになりました。おなかに三つとても小さな穴を開けて、そこから道具を入れて、炎症を起こした盲腸を切り取る手術です。それを聞いてぼくは、切ることにびっくりして、こわくなりました。

だけど、先生たちが「起きたらもう手術は終わっているよ。」など、明るくぼくに話してくれたので、こわさがやわらぎました。

そして、ぼくが目を覚ますと、そこは手術前にいた病室でした。目の前にはお母さんと看護師さんのすがたがあ

りました。その時ぼくは、手術が終わったと気づき安心しました。しかし、とてもおなかがいたくて、いたみ止めを打ってもらいましたが、それもすぐこうかが切れてしまい、なんども起きてねてをくりかえしました。その後も、いたみがおさまることはなく、きついまま一日が終わりまりました。

二日目の朝もいたみは続き、気づくとねてしまうほどでしたが、先生が歩いて腸をうごかすといいと教えてくれたのです。こしずつ病室の中やろうかを、歩き始めました。そして、歩けたり、ごはんを食べれるようになったので、予定より早く退院できました。

入院をしてぼくは健康の大切さを知りました。例えば、健康でなければ歩くことも、食べることも、トイレに行くこともできないということです。他にも、手術後にきつかったり、いたい思いをしてきたので、ぼくはこれから、早ね、早



起きや、朝・昼・夜、栄養バランスが整った食事を欠かせず食べることなど、健康を意識した生活を心がけていきたいです。

また、入院期間中に病院で働いている先生や看護師さんを見て、ぼくが感じたことは、どんなに夜おそい時間でも人を集めて、手術をしてくれることだったり、きついときにナースコールでよぶとすぐにかけてくれること、また、毎日ぼくの体の状態を気にかけてくれること、その他にもいつもえがおでせつしてくれて、ぼくは安心することができました。ぼくが、病院の先生たちに感謝するように、ぼくも人に感謝される大人になりたいです。

選考委員

福岡県教育委員会

大野 義仁

福岡県医師会副会長

平田 泰彦

西日本新聞社報道センター編集委員

鶴 加寿子

福岡県医師会常任理事

原 祐一

筑紫女学園大学名誉教授

中村 萬里

福岡県医師会理事

西 秀博

福岡県医師会広報委員会委員長

松岡 良衛

福岡県医師会理事

田中 耕太郎

福岡県医師会理事

伊藤 重彦

福岡県医師会理事

永田 直幹



募集要項

【開催趣旨】 医療従事者と患者さん、その家族との「信頼関係」という医療の原点にスポットをあて病気になった時に感じたことや介護にまつわる経験、医療従事者とのふれあいなど、医療・介護に関する体験記を募集、コンクールを行い、優秀作品を発表することで、県民、また医療関係者の医療に対する意識を高める。

【応募資格】 福岡県内の学校に在籍する児童及び生徒、および一般県民。※医師を除く。

部門	①一般の部	②中高生の部	③小学生の部
文字数	400字詰め原稿用紙5枚 (2000字)以内	400字詰め原稿用紙5枚 (2000字)以内	400字詰め原稿用紙3枚 (1200字)以内
表彰 (副賞)	最優秀賞 1名 (現金10万円) 優秀賞 若干名 (現金3万円)	最優秀賞 1名 (図書カード5万円分) 優秀賞 若干名 (図書カード2万円分)	最優秀賞 1名 (図書カード3万円分) 優秀賞 若干名 (図書カード1万円分)
募集期間	令和6年7月1日(月)～9月30日(月) 必着		

【応募方法】

- 鉛筆(B、2B) / ボールペン / 万年筆 / パソコンのうち、いずれかを用いて、濃くはつきりと書く。※パソコンの場合、1ページ400字(20字×20行)。
- 表紙をつけて、部門、題名、氏名(ふりがな)、性別、年齢(生年月日)、〒住所、電話番号(FAXがあればFAX番号も)、職業(または学校名・学年)を明記。
- 封筒の表に「心のふれあい大賞」と記載の上、郵送。
〈作品送付先〉 福岡県医師会総務課 作文コンクール係
〒812-8551 福岡市博多区博多駅南2-9-30 (TEL 092-431-4564)

※応募上の注意

- 自作の未発表作品に限ります。
二重投稿、類似、事実でない創作作品、公の刊行物に掲載された作品、盗作の応募は固くお断りします。
応募作品について盗作等による著作権侵害の争いが生じて、主催者は責任を負いません。
違反が確認された際は、受賞決定後も賞の取り消しとなる可能性があります。
- 応募作品は返却いたしません。
- 入賞作品の著作権、出版権は主催者に帰属します。そのため、主催者、後援者が管理するウェブサイトや、雑誌、テレビ、ラジオ、書籍、教材などに利用されることがあります。
- 応募作品に誤字・脱字と思われる内容が認められた場合には、主催者が修正を加える場合があります。

【入賞発表】 令和6年11月下旬 受賞者に通知、後日福岡県医師会ホームページで公表
令和7年1月18日(土) 表彰式を開催(県民のための公開講座と同時開催)

【参加賞】 中高生の部および小学生の部に応募された方全員に蛍光ペンを進呈。

【主催】 福岡県医師会

【共催】 福岡県、福岡県教育委員会(順不同)

【後援】 九州厚生局、福岡市、北九州市、久留米市、飯塚市、大牟田市、行橋市、
福岡市教育委員会、北九州市教育委員会、読売新聞社、産経新聞社、朝日新聞社、
毎日新聞社、西日本新聞社(順不同)



令和7年3月発行

公益社団法人福岡県医師会

〒812-8551 福岡県福岡市博多区博多駅南2-9-30
電話：092-431-4564 FAX：092-411-6858

福岡県医師会からお知らせ

役に立つ医療情報を各専門家がお話する「県民健康づくりセミナー」や定例記者会見の内容など、さまざまな情報を各種SNSなどで発信しています！



公式YouTube
チャンネル



『子どもの口腔機能発達不全症とは』
『救急車 必要なのはどんなとき？』
『A群溶レン菌咽頭炎 警戒続く』
…etc



公式Facebook



公式X(旧Twitter)



＼県民の皆様へ医療に関する様々なお役立ち情報を配信します！／

公式 **LINE**

友だち募集中！



お問い合わせ

福岡県医師会総務・経理課 TEL092-431-4564 FAX092-411-6858
E-mail fpma-somu@fukuoka.med.or.jp

ホームページ➡



